

# 移動動詞語彙の体系化

— 經由位置を基準とする移動について —

荒 田 玲 子

## I はじめに

認知意味論では、あるカテゴリーは、カテゴリーの中心を占めるプロトタイプ的な構成メンバーから、境界域に位置する周辺的な構成メンバーまでの、「傾度」によって特徴づけられる「内的な構造的性」を有していると考える。このことは、現在までにBerlin and Kayの「色彩語」の研究や、Labovの「cupとbowl」の研究、Coleman and Kayの「lie」の研究などで実証されてきた。また、「構成意味論」を提唱する野林正路氏は、類義関係にある二つの語が「中間種」の存在を介して連続的につながることで、意味の網目を構成していることを、氏の一連の研究によって明らかにしてきた。この二つの意味研究の流れは意味の「連続性」を認め、単語もしくは類義語の意味の有り様を現実に即してとらえようとするものである。

ところで認知意味論における「傾度」にもとづくカテゴリーの内的な構造的性は、構成メンバーが有する属性の数と質によって決まる。カテゴリーを語の意味に置き換えてみた場合、構成メンバーとは一々の用例に実現される意味であり、属性はその意味の構成成分である意義特徴に該当すると思われる。ただし、この場合の「用例の意味」とは、その場の状況をも含む一回性の「用法」ではなく、ある意味パターンを有する「意義」を指す。この意味パターンは意義特徴の種類と数によって決まる。すなわち、意義特徴の組み合わせである。意義特徴の組み合わせパターンの一つ一つが「意義」となり、それらが連続的な構造を成したものが「意味」であると考えたい。

本稿では、類義関係にある移動動詞数語を対象に、語の意味について以下の3点を明らかにし、それにもとづいて類義関係にある複数の語の体系化を行うことを目的とする。

1. 語の意義は、限られた意義特徴の組み合わせにより成り立っていること。
2. 語の意味は、複数の意義によって構成され、内的構造的性を有すること。
3. 内的構造的性は、複数の意義と語形態との結合度の強弱で表されること。

そして語の意味の張り合い関係（体系）は、意義特徴の組み合わせパターンの共有の仕方から語の類義関係をとらえることによって描き出せるということを主張したい。

対象は、移動動詞のなかの【經由位置を基準とする移動】をあらわすカテゴリーのうち、類義関係をなしているコエル・コス・マタグ・ワタルの4語である<sup>1)</sup>。

まず、用例分析によって、この4語の意義特徴を抽出する。次に得られた意義特徴を組み合わせて、各組み合わせごとに例文を作成する。そしてアンケートによりそれぞれの組み合わせパターンが4語の意義としてどの程度認められるのかという認知度<sup>ie2</sup>を測る。その結果に基づいて各語の意味の外延および内的な構造的性（語形態と意義との結合度<sup>ie3</sup>）を明らかにし、4語の意味の張り合い関係を描き出す。

## Ⅱ 意義特徴の抽出

- 1 隣町に行くためには、あの川を{渡ら／越え／越さ}なければならない。
- 2 敷居を{越えて／またいで}家のなかに入る。

用例1より、ワタルとコエル、コスは置き換え可能である。用例2のコエルとマタグも同様である。以上のようにコエル・コス・マタグ・ワタルには類義関係が見られる。

これらはある場所を経由する移動をあらわす動詞（以下「經由移動」）である。經由移動の動詞には、その他に以下の表1に掲げた9語があり、様々な観点での張り合い関係がみられる。

表1

クグル・スギル・タドル・ツタウ・ツタワル・トオル・ヌケル・ヨギル・ヨコギル
---------------------------------------

本稿では先の4語について<sup>ie4</sup>、表1の經由移動動詞との関わりにも適宜触れながら、5つの観点<sup>ie5</sup>から意義特徴を抽出する。

なお、意義特徴の抽出にあたっては、基本的に実際の用例に基づいて行い、適宜作例によって補うこととする。用例の採取は、昭和40年代以降に出版された小説による。

### Ⅱ-i 經由位置の方向性と動作主の移動の方向性との関係

4語はいずれも〈動作主ガ 場所ヲ V〉という文型を基本とし、何ものかがある場所を経由して移動することをあらわす。動詞によってその場所（經由位置）機能が異なる。例えば「川」は用例3から用例6にみられるように、コエル・ツタウ・トオル・ワタルの四語の經由位置になり得る。けれども、動作主が移動する方向は必ずしも同じにはならない。

- 3 いまのところ、多摩川を越える気配はないが、やがて羽化したときには、確実に八王子を越えていく。（下線は発表者付す。以下同） 〈宮部 133〉
- 4 六十八間余の大川をわたって対岸の寺島村へ着くと、（以下略） 〈池波 12〉
- 5 降った雨水は湖には溜らずに、幾つかの川を伝って海に流れ落ちてしまうのですよと言われました。 〈宮本・錦繡 143〉
- 6 大川を通る船の櫓音が、風によって何やら物憂げにきこえてくる。 〈池波 535〉

\*用例末の〈 〉内は、出典の作者名と頁数を示す。

用例3のコエルと用例4のワタルは、動作主が「川」の流れる方向を横切る形で対岸へ移動することをあらわす。一方、用例5のツタウと用例6のトオルは、動作主が「川」の流れにしたがう形で同方向（海の方）へ向かって移動することをあらわす。

すなわち、コエルとワタルは経由位置の伸びる方向に対して「垂直方向」への移動であり、ツタウとトオルは経由位置の伸びる方向と「平行方向」への移動といえる。同様に用例7より、マタグは横に伸びる柵に対して垂直方向に移動することをあらわすといえる。

7 裏庭から柵一つまたいでしばらく歩けば、目がくらみそうな岸壁が待ち受けている。

〈宮部 624〉

したがって「移動の方向性」という観点からそれぞれの動詞における動作主と経由位置との関係を見ると、コエル・(コス)・マタグ・ワタルにはいずれも【垂直方向への移動】という意義特徴が認められる<sup>186</sup>。

## II-ii 経由位置における対象と動作主との位置関係

8 立入禁止のロープを{越えて/またいで}中に入った。 〈作例〉

8' 立入禁止のロープを{くぐって}中に入った。

8も8'も{ }内外は変わらない。{ }内の動詞はいずれも共起可能である。しかし、明らかに8と8'とはあらわす動作が異なる。8はロープの上方を移動することをあらわし、8'はロープの下方を移動することをあらわす。

このように経由移動をあらわす動詞には「動作主が経由位置のどこを移動するのか」という動作主と経由位置との位置関係が、動詞自身に内在するものがある。

9 とにかく海に沿って自分が眼をつけられるより、山を越えたほうが安全だと思いました。 〈遠藤 171〉

10 橋を渡って左岸に移ってから、谷間はふたたび溪谷の様相を取り戻した。

〈森村 86〉

11 敷居をまたいで、祐司は室内に足を踏み入れた。 〈宮部 566〉

用例9・10・11から分かるように、コエル・(コス)・マタグ・ワタルの4語はいずれも【動作主が経由位置の上方を移動する】ことをあらわす。

## II-iii 移動距離

経由移動は基本的に移動の過程段階をあらわすものである。したがって起点移動や着点移動よりも、移動に要する距離や時間などが注目されることがある。動詞によっては、移動距離の長さや移動時間の長さを意義特徴として有する。

11' 敷居を{○またいで/○越えて/×渡って}、祐司は室内に足を踏み入れた。

12 道の向こうへ行く時、私は歩道橋を使わず車道を{×またぐ／○越える／○渡る}。  
〈作例〉

13 人をまたいじゃいけません！ 〈アンケートの被調査者作例〉

マタグは、用例11'「敷居」や用例13「人」、用例7「柵」などのように、動作主が一步で通過できる程度の距離の移動をあらわす。用例12のように一步以上の距離の移動の場合、マタグにならない。すなわちマタグは【一步の距離の移動】という意義特徴を有しているといえる。一方ワタルは一步程度の短い距離の移動の場合、共起しない。【二歩以上の距離の移動】（＝【一步の距離の移動】）がワタルである。コエルは一步の距離、長い距離いずれの場合もあらわすので、特にそのような観点をもたない語と思われる。

#### II-iv 動作主と経由位置との接触

用例11'で敷居を通過するにあたって、マタグとコエルのあらわす動作は必ずしも同じではない。用例14のように、動作主が敷居と接触する場合、コエルは問題ないが、マタグは不適格となる。

14 敷居を踏み{○越える／×またぐ}。 〈作例〉

マタグは【動作主が経由位置と接触しない】でそこを通過することをあらわす動詞である。一方のコエルは動作主が敷居と接触しない場合（踏まないでコエル）もあらわすことができ、特に接触という観点は要しない。ワタルも接触という観点には無関心である。

#### II-v 経由位置が与える物理的・心理的な作用

経由位置の性質が動作主に対してプラスの作用を与える動詞と、マイナスの作用を与える動詞とがある。

例えばツタウは経由位置にプラス作用がある。

15 明恵は祐司のシャツの背中をつかみ、一緒に歩いていたが、そっとその手を離して、左手で壁を伝いながら進み始めた。 〈宮部 366〉

16 頂きに向って押しあげた船は、そこで漕ぎ手を乗せ、上り坂と同じようにつくれた下り坂の軌道を伝って、金角湾の中にすべりこむ仕かけになっていた。

〈塩野 289〉

用例15や16のように、動作主が経由位置の助けをかりることで、スムーズな移動を行うことをあらわす。

17 それをシャツでくるんでバンドでくくり、持ち易くして川を渡った。日照りつづきで水は深いところも股までしかないが、石のヌラに足を取られて一度ならず水中に尻餅をついた。 〈井伏 617〉

18 あるいは南に向う途中に広がっている石灰岩の荒野を（獣たちは）越えることができないのかもしれん。 〈村上 687〉

一方、マイナス作用のある動詞として挙げられるのが、用例17や18のようなコエル・(コス)・ワタルなどである<sup>17</sup>。マイナス作用とは、経由位置が物理的に移動の障害となったり、心理的に動作主に圧迫感を与えたりして、移動を妨害することを指す。

さらにコエル・コスにおける障害は、以下の用例19「野口五郎岳」や用例20「七メートルか八メートルの高さの長大な壁」のように【高い】という特徴をともなうことが多い。

19 加藤は野口五郎岳を越えた。彼はまだ疲労を見せていなかった。頂上の三角点標石を懐中電灯で探すだけの余裕さえあった。野口五郎岳を越えて、少々おりたところに窪地があった。 〈新田 816〉

20 街のまわりは七メートルか八メートルの高さの長大な壁に囲まれ、そこを越すことのできるのは鳥だけだった。 〈村上 55〉

## II-vi 意義特徴の提示<sup>18</sup>

移動の過程段階における動作主と場所の関係に着目したところ、「方向性」「位置関係」「移動距離」「接触」「作用」という6つの分析の観点が得られた。そして、それぞれの観点における分析の結果、それぞれの語について表2のような意義特徴が得られた<sup>19</sup>。

表2

動詞 \ 観点	①方向性	②位置関係	③移動距離	④接触	⑤作用
コエル	垂直	上方			— (障害・高い)
コ ス	垂直	上方			— (障害・高い)
マタグ	垂直	上方	一歩	非接触	
ワタル	垂直	上方	二歩以上		— (障害)

\*表中の斜線は上記の観点がその動詞には無関係であることを示す。

## III 意義特徴の組み合わせ

それぞれの語が実際に用いられる場合、常に上記の意義特徴のすべてを満たしているとは限らない。例えば表2では、コエルには【垂直/上方/障害・高い】という4つの意義特徴が認められ、「塀を越える」という場合はすべての意義特徴を満たすが、「海を越える」という場合は【垂直】および【(障害)高い】という意義特徴は必要ではない<sup>10</sup>。この場合、【上方/障害】という2つの意義特徴のみの組み合わせで成立しているのである。

したがって、語の意味の外延を明確にするためには、どの意義特徴の組み合わせがそれぞれの語の意義として成り立つのか(あるいは成り立たないのか)を明らかにしなければならない。すべての意義特徴を組み合わせ、その組み合わせパターンごとに語と対応させた時、人があるパターンをその語の意義として認めるか否かを調査する必要がある。

また、外延だけではなく、語の意味の内的構造も、各組み合わせパターンをその語の意義としてどれだけの人が認知しているのかを調査することで明らかになると思われる。

そこでまず、各観点ごとに抽出された意義特徴を含む場合と含まない場合を整理したのが表3-1である。表の丸数字は表2の観点に付した番号と対応している。抽出した意義特徴を含む場合はプラス (+)、含まない場合はマイナス (-) とした。

表3-1

①+	垂直方向への移動
-	垂直方向への移動ではない (水平方向への移動)
②+	上方移動
-	上方移動ではない
③+	一步の距離の移動
-	一步の距離の移動ではない (二歩以上の距離の移動)
④+	経由位置との接触
-	経由位置と非接触
⑤+1	場所が移動の障害となる (+高さ)
+2	場所が移動の障害となる (-高さ)
-	場所が移動の障害とならない

次に、これらの意義特徴を観点ごとに一種ずつ組み合わせる。すると形態上は、表3-2の「組」とある算用数字で示した「組み合わせ番号」のように、全部で48組できる。ただし、これは機械的な組み合わせなので、実際にはあり得ない状況をあらわす組み合わせもできる。そのような実現不可能な意義特徴の組み合わせ<sup>注1)</sup>を除くと、「通」という、カタカナで示した「通し番号」アからホまでの30通りの組み合わせができる。

表3-2 (\*…通し番号中のこの記号は実現不可能な意義特徴の組み合わせを示す)

組	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
通	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	*2	サ	*1	*1	*1	シ	ス	セ	ソ	*2	タ	*1	*1	*1
①	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	+	+	+	+	+	+	-	-	-
②	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	+	+	+	+	+	+	-	-	-	+	+	+
③	+	+	+	+	+	+	-	-	-	+	+	+	+	+	+	-	-	-	+	+	+	+	+	+
④	+	+	+	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
⑤	+1	+2	-	+1	+2	-	+1	+2	-	+1	+2	-	+1	+2	-	+1	+2	-	+1	+2	-	+1	+2	-
組	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
通	チ	*2	ツ	テ	ト	ナ	*1	*1	*1	ニ	*2	ヌ	ネ	ノ	ハ	ヒ	*2	フ	*1	*1	*1	ヘ	*2	ホ
①	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
②	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
③	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-
④	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-
⑤	+1	+2	-	+1	+2	-	+1	+2	-	+1	+2	-	+1	+2	-	+1	+2	-	+1	+2	-	+1	+2	-

#### Ⅳ 語彙の体系

表3-2で示した意義特徴の組み合わせパターンごとに例文を作り<sup>12)</sup>、各パターンと各語（形態）との結合度の強さを調べるため、アンケートをおこなった。

等質性のある母集団のサンプルを得るために、調査は地域と年代を限定しておこなった。調査の概要は以下の通りである。

被調査者：広島県西部方言（安芸方言）話者（生え抜き）のうち、20代の男女。

日 程：平成12年10月末から11月上旬。

方 法：アンケート用紙を郵送・手渡し・電子メールのいずれかの方法により配布・回収。

有効回答人数：22名（男性12名、女性10名）。

内 容：表3-1の通し番号のある意義特徴の組み合わせについて、各一例ずつ作例し、その用例にコエル・コス・マタグ・ワタルが当てはまるか否かを問う。

また、この4語以外により適当な語句があれば、それを空欄に書き込めるようにした。さらに用例分析の際、コスは具体的な移動よりも状態変化をあらわす用例が多く得られたことから、中心的な意義が状態変化にあると仮定し、それを確認するために、物質、時間、温度の量的な変化をあらわす例文（マーム）を調査項目に3例加えた。マタグやワタルには無関係である。

##### Ⅳ-1 各語の外延と内的構造的形態と意義の結合度

アンケート結果にもとづき、それぞれの語の外延及び内的な構造的性を明らかにしていく。

表4-1 意義特徴の組み合わせ別回答人数一覧

通し番号		アイウエオカキクケコサシスセソタチツテトナニヌネノハヒフヘホマミム
①垂直方向		+++++-----+----- 状状状
②上方移動		+++++---+---+---+---+--- 態態態
③一步の距離		+++++-----+----- 変変変
④接触		+++---++++-----+---+--- 化化化
⑤障害(1+高さ)		+1+2-+1+2-+1+2-+1+2-+1+2-+1+2-+1+2-+1+2-+1+2-+1+2-
コエル	計	18 1 6 16 1 2 19 4 4 0 1 21 11 17 3 0 0 1 16 8 1 0 0 15 17 13 1 0 2 3 20 10 21
コ ス	計	6 0 1 15 1 3 3 1 0 0 1 3 2 2 1 0 0 1 8 1 0 0 0 6 1 5 0 0 0 0 8 18 8
マタグ	計	0 1 3 0 20 21 0 0 0 10 0 0 0 0 1 2 1 0 0 1 0 0 0 0 0 0 1 1 2 1 0 0 0
ワタル	計	0 16 3 0 2 0 2 22 21 0 0 0 16 2 1 0 0 0 0 2 7 1 2 2 5 0 0 1 2 3 0 0 0

表4-1はアンケートの結果を一覧表にしたものである。横軸上段に通し番号、中段に意義特徴の組み合わせを示し、下段に4語がそれぞれの組み合わせに当てはまると回答した人数を示している。意義特徴の組み合わせパターンによって当てはまる動詞のばらつきが大きいことがわかる。パターンによってはその語の意義であるかどうか意見が分かれる。全員、またはほとんどの人がその語の意義として認知するパターンもあれば、ごく少数の人しか認知しないパターンもある。認知度が高いパターンほどその語との結びつき(結合度)が強く、その語らしい意義であると考えられる。しかし、このままではそれぞれの動詞の意味の広がり、および結合度がわかりにくい。そこで、以下表4-2から表4-5まで、各動詞ごとに認知度の高い組み合わせパターンから低いパターンまで順に並べ、さらにそれに対応する形で図4-2から図4-5にかけて、その語との結合度および外延を示す。

表4-2 コエルにおける認知度順組み合わせ一覧(認知度は、(回答人数÷全人数22)×100で求めた。)

通し番号	シ	ム	マ	キ	ア	セ	ノ	エ	テ	ネ	ハ	ス	ミ	ト	ウ	ケ	ケ	ソ	ホ	カ	ヘ	イ	オ	サ	ツ	ナ	ビ	コ	タ	チ	ニ	ヌ	フ	
コエルの認知度(%)	95	95	91	86	82	77	77	73	73	68	59	50	45	36	27	18	18	14	14	9	9	5	5	5	5	5	5	0	0	0	0	0	0	
①垂直方向	+	状	状	+	+	+	+	-	+	-	-	-	+	状	-	+	+	+	+	-	+	+	+	+	-	-	+	+	+	+	+	+	+	-
②上方移動	+	態	態	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	態	+	+	+	+	-	+	-	+	+	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-
③一步の距離	-	変	変	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	変	-	+	-	+	-	+	-	+	+	+	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-
④接触	-	化	化	+	+	-	-	+	-	-	-	-	-	化	+	+	+	+	-	-	-	+	-	+	+	+	+	+	+	-	+	-	-	+
⑤障害(1=高さ)	+1			+1	+1	-2	+1	+1	+1	-2			+2	+2	+2	-1	-1	-1	-1	+2	+2	-	-	-	+1	+1	-1	+1	-1	-1	-1	-1	-1	

表4-2より、コエルは意義シ【垂直方向】【上方移動】【二歩以上の距離】【非接触】【障害・高さ】という意義特徴の組み合わせ、および意義ム【状態変化】(例文「気温が30度をこえた」)が認知度95%と最も高く、これらの意義と形態「コエル」との結合度が非常に強いといえる。また前者の意義は第2節で得られた意義特徴に対応しており、中心的意義ということができる。そして、【状態変化】の意義がいずれも高い認知度を示している点が注目される。コエルは後述のコスとともに、空間移動と状態変化のどちらのカテゴリーにも強く結合している語といえよう。

コエルの意義ではない認知度0%の意義は6、コエルの意義として認知されているものは27ある。認知度の高いものから低いものまで、ほぼ均等ならばりをみせており、結合度にかたよりはみられないといえよう。

意義特徴を個別に見ると、【上方移動】という意義特徴は認知度18%以上の意義すべてに存している。対照的にコエルの意義ではない認知度0%の意義においては、すべて【-上方移動】となっている。したがって、【上方移動】はコエルの意味において最も重要な要素といえるだろう。また【垂直方向】という意義特徴は、形態との結合度が高い意義に、集中的に備わっている。【障害・高さ】、【二歩以上の距離】という意義特徴も同様である。【接触】に関してはそのような傾向はみられない。





義も他の語と置き換え可能なことから、カバーする意味範囲が広い語といえる。

#### IV-ii 4語の体系化

以上の一語ずつの分析結果を2語ずつペアにして、相関関係を見る<sup>ie15</sup>。2語ずつの分析結果を組み合わせて、最後に4語全体の張り合い関係をイメージ図としてあらわしたい。

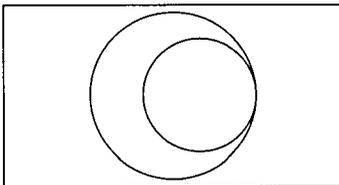
まず、図4-1から図4-6をもとに2語ずつの分析を行う。図の縦軸と横軸は各語の認知度である。それぞれの語の認知度が交わる場所に、意義がカタカナであらわされている。分布が上方に片寄っているほど、縦軸の語との結合度が強く、右方に片寄っているほど、横軸の語との結合度が強くなる。図の内部は4つの範疇に分かれている。左上の縦長の枠は横軸の語の認知度が0%である。すなわち、縦軸の語の意義ではあるが、横軸の語の意義ではないという縦軸の語特有の意義範疇である。右下の横長の枠はその逆で、縦軸の語の認知度が0%で、横軸の語特有の意義範疇である。右上の大きな枠内は、二語に共通する意義範疇である。対照的に左下の枠内はどちらの語とも結合しない意義の範疇である。

まず、次頁の図4-1をみると目に付くのが、左上の範疇が空白になっていることである。これはコス特有の意義はなく、コスの意義はいずれもコエルと共有であることをあらわす。したがって、コスはコエルに内包される関係にあることがわかる。

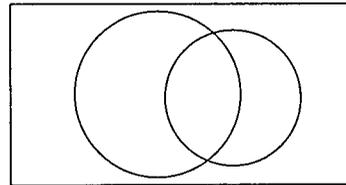
コエルとコスの共有部分の意義の分布は、下寄りでも右上りの偏りがみられることから、コエルの方が意義と形態との結合度が強いことがわかる。そして右上がりの直線的な分布であることから、2語の内的構造は類似の広がりを見せることがわかる。

また、コエルは形態との結合度が強い部分がコスと共通しており、コエルのみの範疇には形態との結合度が低い意義しかないため、コエルの中心部分から大部分はコスと重なりあい、コエルの末端がコスよりやや広がった以下のベン図のような「入れ子型」<sup>ie16</sup>の関係にあるといえる。

図4-2より、マタグの中心的意義はコエルとの共有範疇にあり、コエルの意味の広がり末端（周辺的意義）と重なっていることがわかる。コエルの中心的意義はマタグとは無関係な範疇にあり、コエルがマタグに対して支配的な「ブリッジ型」の関係にあると言える。



入れ子型の関係図



ブリッジ型の関係図

図4-1 コエルとコスの相関図

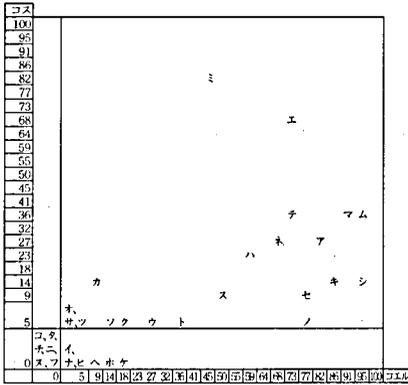


図4-2 コエルとマタグの相関図

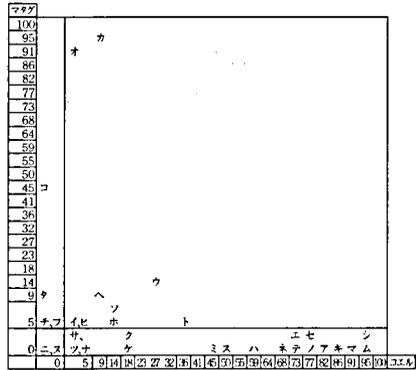


図4-3 コエルとワタルの相関図

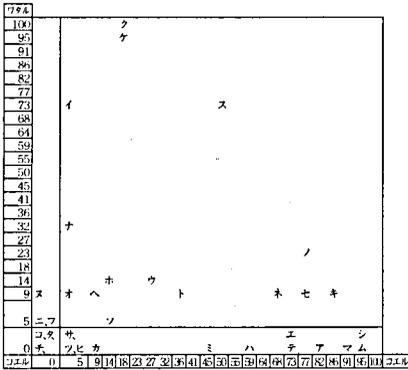


図4-4 コスとマタグの相関図

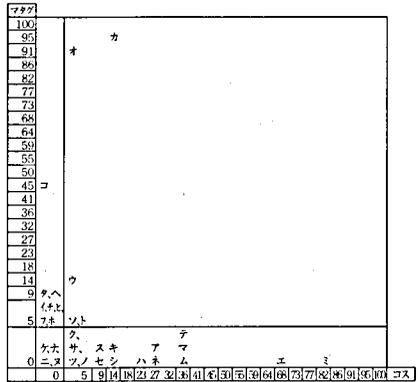


図4-5 コスとワタルの相関図

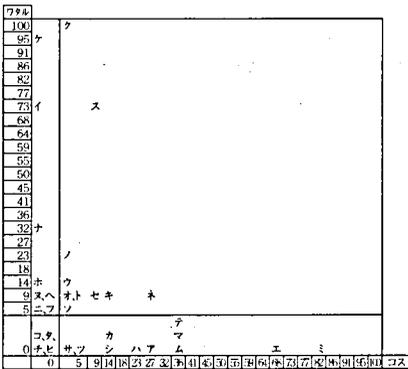


図4-6 マタグとワタルの相関図

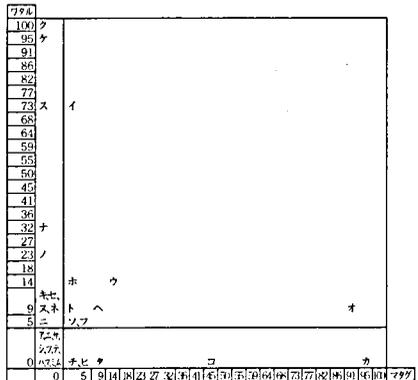


図4-3を見ると、ワタルとコエルの共通範疇においては、角度の広い放射状のひろがりになっている。したがって、二語の関係は、互いの末端部分と中心部分とが重なり合う。また、ワタル特有の範疇にある意義はワタルとの結合度が非常に弱い、意味の末端部分に当たる意義である。そしてコエルの中心的意義はワタルとは重ならない、ほぼ対等な「ブリッジ型」の関係になっている。

図4-4より、コスとマタグにはほとんど共通部分がなく、両者の関係が稀薄なことがわかる。ただし、マタグの中心的意義がコスの末端と重なっている。コエルとマタグの関係と同様にコスがマタグに対して支配的だが、重なるの少ない「ブリッジ型」の関係にあると言える。

図4-5からは、ワタルとコスとがおもに末端で重なり合い、かつ、ワタルの中心的意義がコスの末端と重なっていることがわかる。ワタルの中心がややコスに寄った「ブリッジ型」の関係である。

図4-6に見られるマタグとワタルの関係は、末端部分で重なりあうものの、それぞれの末端部分と中心に近い部分とが重なり合うという、ややコエルとワタルに類似の「ブリッジ型」関係である。ただし、どちらの語も当てはまらない意義が多いので、コエルよりも小さなブリッジになっている。

以上の2語ずつの分析結果を重ね合わせて、全体を体系化する。ただし、図4-6から4-11までに見られる意義の分布の様相を4語すべてに重ね合わせると、平面ではとても描ききれない。そこで結合度については保留し、意義の共有関係のみに注目した形で意味の張り合い関係を図示すると図4-12のようになる。円の大きさは各語を構成する意義の数にもとづき、語の意味の広がりをあらわしている。

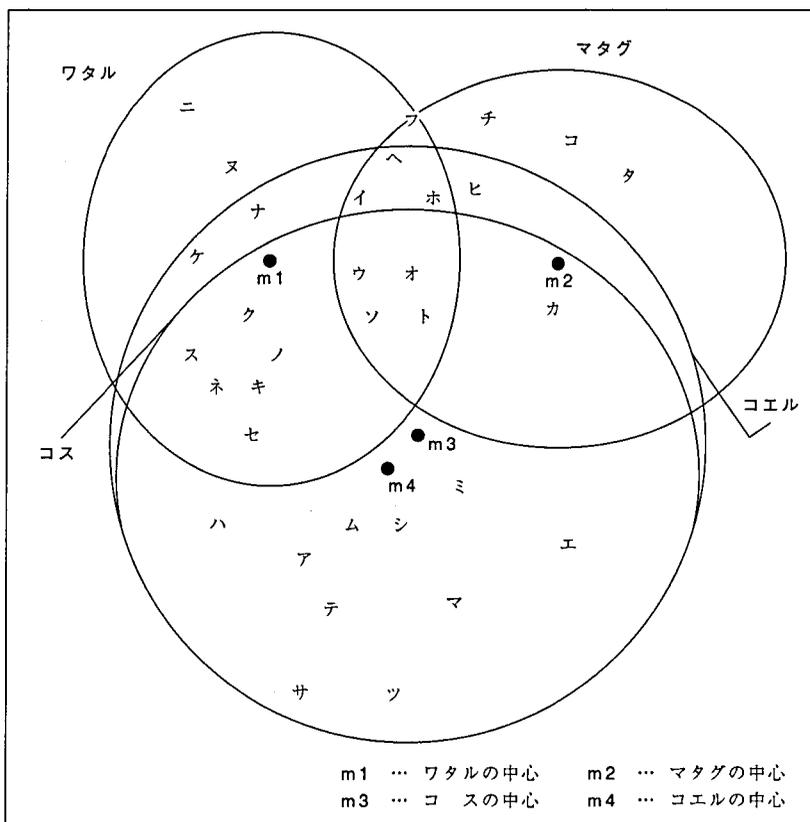
## V おわりに

以上の分析を通して、語の意味が語の形態とは一対一の対応関係にはないこと、少数の意義特徴の組み合わせによって複数の意義が生じ、それが一つの語形態に対応していること、そして各意義が形態との結合度の強弱を有しながら語の意味を構成していることなどが明らかになった。

さらに、複数の語の意味の張り合い関係は、語形態との結合度の強弱の関係を内包しつつ、同じ意義特徴の組み合わせパターンを共有することで成り立っていることを示した。

語の意味の中心から周辺へという連続的な広がりの中に、他の語が入り込んできて、別の広がり（カテゴリー）へとつながり、それが幾重にも重なることで語彙の体系が成り立っていると考える。したがって、1語の意味の広がりと言語の張り合い関係を組み合わせることで、真に語彙の体系を描くことが可能になると思われるのである。

図4-12 4語の意味の体系化（イメージ図）



## 参考論文

國廣哲彌編「ことばの意味3 辞書に書いてないこと」(1982 平凡社)

國廣哲彌「意味論の方法」(1982 大修館書店)

野林正路「意味をつむぐ人びと—構成意味論・語彙論の理論と方法」(1986 海鳴社)

同 「研究報告集構成意味論の展開—世界像と言語作品の解釈学をめざして—」

(1999 麗澤大学大学院 意味論ゼミ編)

半沢洋子「場所の移動を表す動詞の意味分析—「越える」と「渡る」について—」

【国語学研究】17号 (1977 東北大学文学「国語学研究」刊行会)

森田良行「基礎日本語」(1977 角川書店)

吉村公宏「認知意味論の方法—経験と動機の言語学—」(1955 人文書院)

## 用例の出典

(百冊) : CD-ROM版新潮文庫の百冊

池波正太郎『剣客商売』(百冊)、井伏鱒二『黒い雨』(百冊)、遠藤周作『沈黙』(百冊)、塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』(百冊)、新田次郎『孤高の人』(百冊)、宮部みゆき『レベル7』新潮文庫、宮本輝『錦繡』(百冊)、村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(百冊)、森村誠一『砂の墓碑銘』新潮文庫

## 付 記

本稿は、2000年度広島大学国語国文学会秋季研究集会において口頭発表したものに加筆、訂正を加えたものである。席上、あるいはその他の機会に、多くの先生方から有益なご教示を賜った。ここに記して感謝する次第である。また本研究は、アンケートにお答えくださった多くの方々のご協力なくしては成り立たなかった。最後になったが、アンケートにご協力くださったすべての方に心より感謝申し上げる。

## 注

- 注1 将来的には移動動詞カテゴリーの全的な語彙体系の構築を目指している。
- 注2 認知度とは、どのくらいの人が、ある意義特徴の組み合わせパターンをある語の意義として認めたのかということである。百分率であらわされる。認知度100のとき、そのパターンはすべての人がある語の意義として認めたということであり、その語の中心的意義といえる。認知度0であれば、そのパターンはその語の意義ではないということになる。
- 注3 結合度とはその語らしい意義として人々に認知されている度合いの強弱をいう。認知度の高い意義ほどその語(形態)との結合度が強いとみなす。語におけるある意義と他の意義との関係を図る相対的な尺度である。例えば意義Aが認知度95で、意義Bが認知度64のとき、意義Aは意義Bよりも結合度が強いということになる。
- 注4 ただし、コストは「引越す」意の2例を除くと、単独形で空間移動をあらわす用例は1例しか得られなかった。用例の大部分は複合形の空間移動(飛び越す、追い越す等)と状態変化(「気温は30度をこえた」「限界をこえた」等)で占められていた。これらの用例は、空間移動としての意義特徴を抽出するのに適当でない。そのため今回はコストをコエルに準ずるものとみなし、特に扱わないことにする。
- 注5 今回着目した5つの観点によって、4語それぞれの意味を構成している意義特徴をすべて網羅した訳ではない。ここでは4語の意味を弁別し得る意義特徴を中心に取り扱っている。
- 注6 同時に経由位置は「境界」として機能しているとも言える。
- 注7 その他、マイナス作用のある動詞には、移動の際に経由位置が動作主に物理的・心理的に圧迫感を与えるクグルや、経由位置が「教えられた道順」「シュプールの跡」のように時々立ち止まって

確認が必要なものであったり、「(混雑する)人ごみのはずれ」「細い道」など移動しにくく煩わしさを感じさせるようなものであったりして、物理的・心理的に動作主のスムーズな移動を妨げるタドルなどがある。

注8 ここで分析の対象となった観点は、経路移動カテゴリーにおいて有効なものである。他のカテゴリーにおいては、このカテゴリーと同じ観点だけではなく、まったく別の観点も意義特徴を抽出する上で必要になるだろう。

注9 この5項目のカテゴリーの観点としての有効性は、以下の分析において検証されよう。表2に示した意義特徴が、形態との結合度が高い意義を構成する要素となり得ている場合、その観点はカテゴリー内の意味関係を明らかにする上で有効であると言える。

注10 ただし「海」があちらとこちらとを隔てる、(心理的に)高い障害であるとみなすならば、【(障害)高い】という意義特徴を有していると言うことも可能である。

注11 表3-2中の「\*1」および「\*2」の部分に該当する。

「\*1」は【水平方向への移動(①-)】の場合、主体は対象(場所)の伸びている方向に沿った移動であり、必然的にある程度の距離を移動することをあらわす。そのため、移動距離は一步(③+)ということはあり得ない。すなわち(①-/③+)という組み合わせは実現不可能である。したがって、この組み合わせを有するものは検討から除外する。

また「\*2」は、⑤の障害の【高さ】の有無は上方移動(②+)であることを前提として成り立つ意義特徴なので、②-の場合は必然的に「高さ」の有無という区別は不要となる。したがって、②+の場合、⑤は【+1 : +2 : -】という三項対立ではなく、【+ : -】の二項対立になる。組み合わせ番号(まだここではなんらかの語の意義として認められていない段階なのでこう呼ぶ)(10)(11)、(19)(20)、(25)(26)、(31)(32)、(34)(35)、(40)(41)、(43)(44)、(46)(47)、の8ペアが該当する。ただし、(31)(32)、(43)(44)は、注1の除外条件が当てはまるため、検討から除かれる。

注12 紙幅の都合により、作成した例文は割愛する。なお、今回の一部の作例に関して、不自然な状況設定である、多様な解釈を許してしまうなど、不備な点があった。以後、改善を要する。

注13 ただし今回は「引越す」意の用例については分析の対象から除いている。このカテゴリーの他の語との類義関係にはない意義のためである。しかし、各語の全的な意味の記述、および意味の拡張について検討するにあたっては分析対象にすべきであろう。

注14 コエルの意義シヤコスの意義エについては「トブ」を当てはめた人が数人いた。

注15 2語ずつ分析するのは、4語全体を一度に扱うと複雑すぎるためである。

注16 図のような4分法の考え方および、「連立入れ子型」と「ブリッジ型」という関係システムをあらわす用語は野林(1986)他にしたがうものである。

ただし、拙論の方法は、関係システムだけではなく、結合度の相関関係による分布、中心的意義の位置、各語の意味の広がり大きさあらわすことが可能である点が大きく異なる。

—あらた・れいこ、本学大学院博士課程後期在学—